

長い長いお医者さんの話

K. チャペック作 中野好夫訳



岩波少年文庫 1001

989.5 長い長いお医者さんの話

K. チャペック作

中野好夫訳

岩波書店 1952

244 p. 18 cm (岩波少年文庫 1001)

小学中級以上

K. Čapek : Fairy Tales, 1931

長い長いお医者さんの話

岩波少年文庫 1001

1952年9月15日 第1刷発行 ©

1983年5月10日 第33刷発行

定価 450 円

訳者 なかの よし お
 中 野 好 夫
発行者 緑 川 亨



発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111 振替東京 6-26240 会会

印刷・製本：法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

長い長いお医者さんの話

K. チャペック 作

中 野 好 夫 訳

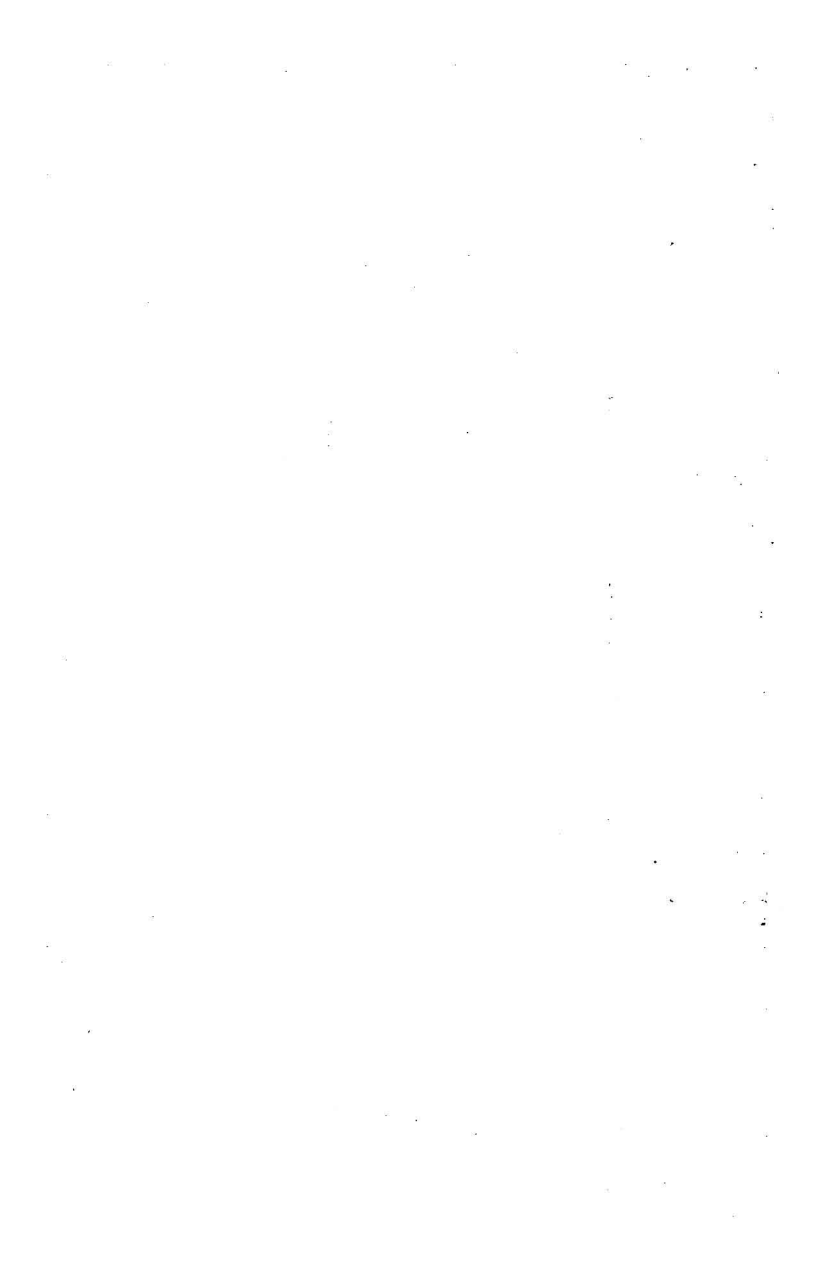
岩波少年文庫 1001

300841

もくじ

郵便屋 ゆうびんや さんの話		七
カッパの話		四九
小鳥 てんし と天使のたまごの話		六七
長い長いおまわりさんの話		八三
犬 ようせい と妖精の話		一四
宿 やど なしルンペンくんの話		一五一
長い長いお医者 いしや さんの話		一八三
あとがき		二四一

さし絵 ヨセフ・チャベック



長い長いお医者さんの話

——チャペック童話集——

郵便屋ゆうびんやさんの話

王さまだとか、王子さまだとか、どろぼうだとか、騎士かしだとか、そのほか、魔法まほうつかい、大男、きこり、カップ、そういう身分みぶんや職業しよくごとに、みんなそれぞれお話ができていますね。わたしは、いつもふしぎに思うのですが、それならばなぜ郵便配達ゆうびんはいたつにだって、おなじようにお話があつてはいけないのでしょうか？ 考えてもごらんなさい。郵便局といえ、まるで魔法のお城しろそっくりでしょう。「タバコ、ごえんりょくください」だとか、「犬、はいらぬこと」だとか、いろんなはり札かが、一めんにベタベタはりまわされているのですもの。龍りゆうのお城だとか、魔法つかいの部屋へやだとかいっても、あんなにたくさん「注意」や「……せぬこと」がはつてあるものじゃありません。それだけでも郵便局というところが、ふしぎと神秘ひみつでいっぱいな場所ばしょだということがおわかりでしょう。では、あなたがたのうちだれか、夜よ中に郵便局がしまつてから、あの中でどんなことがおこるか、のぞいて見た人がありますか？ ひとつ、そうつとのぞいてみたいもんですね。ところが、のぞいてみた人がひとりあ

るのです——え、うそでしようって？ いえいえ、ウォーカさんといって、郵便局にやとわ
れている配達屋さんなのです。——正真正銘、自分の目でそれを見たというのですが、つま
り、その話を、あとでウォーカさんが友だちに話し、それをまた友だちがほかの人に話す、
といったぐあい、とうとう、わたしの耳まではいってしまったというわけなんです。むろ
ん、わたしも、その話を自分の胸だけに秘密にしておくことはすこしもありませんから、ひ
とつそれをお話してみることにしましょう。

ところで、郵便配達のウォーカさんですが、じつはウォーカさんは、自分のしごとに少々
いやががさしていたのでした。

「郵便配達——なんていやな商売だろう。走って、かけて、走って、とんで、まいにちま
いにち、三万三千三百三十三歩は走りまわらなければならない。その中には、階段をのぼ
ったりおろたり、そのはしご段は八千八百八十八段はあるにちがいない。それに配達する手紙
といったら、刷り物だの、勘定書だの、だれひとり喜んでくれそうなのはありやしない。
ほんとに、くだらないものばかりだ。第一、郵便局というところからして、くそおもしろ

くもない。まったくへんなところだよ。おとぎ話ひとつありそうになし。」といったふうで、ウォーカさんは、郵便配達という自分のしごとにブツブツ不足をならべていました。ところ



大戸がしめられて、あとには、ウォーカさんがたったひとり、がらんとした部屋の中にとじこめられたまま、それでもまだぐっすり寝こんでしまっていたのです。

が、ある日のこと、ウォーカさんはすっかり元気をなくしてしまつて、郵便局のストーヴのそばに腰をおろしたまま、うとうとと眠ってしまったのです。そして、そのまま六時になっても目をさまさない。六時が鳴って、なかまの配達人たちもひとりひとり、ぼつぼつ帰ってしまうと、やがて郵便局の

まいよ夜中近いころだったでしょうが、ウォーカさんは、何かネズミでも床ゆかの上を走っているような、ピタピタというかすかな物音に、ふと目をさしました。



いの、それはかわいらしい、それでいて、あごにはまっ白いひげをふさふさとはやした小人こびとの一団いちだんでありました。それがどうでしょう。そのちっぽけなからだに、ちゃんと一人まえの

「おやっ!! ネズミだな。」ウォーカさんは思わずつぶやきました。「こりや、ネズミとりをかけなくちゃいけないぞ。」ところが、てっきりネズミだとばかり思ってたあたりを見まわした時に、ふとウォーカさんの目にうつったものは、意外がいにもそれはネズミではなくて、郵便局ゆうびんきょくの妖精ようせいだったのです。せいぜい、ヒヨッコかリスか、それともハツカネズミくら

郵便配達の制帽をかぶり、しかも、しごとに出る時のマントまで、そっくり着こんでいるではありませんか。

「これは、おどろいた。」ウォーカさんは、思わずひとり言が口から出かかりましたが、ふと小人たちをびっくりさせてはいけないと思いなおして、じつとかたずをのんだまま、まばたき一つしないで、ようすをうかがっていました。するとどうでしょう。ひとりの小人は、あすの朝ウォーカさんが配達するはずになっていた手紙の束をひっぱり出すと、やがて一枚、たんねんにしらべはじめました。そうかと思うと、もうひとりの小人は、しきりに郵便物をよりわけています。またほかのひとり、小包を一つ一つハカリにかけては、せつせとそれに附箋をはりつけています。「どうも荷づくりが悪くていけない、規則違反だ。」どうやらブツブツこごとを言っているらしいのもいれば、すっかり局員のような顔をして、ゆうゆうとすわって、しきりにお金のかんじょうをしているのもいます。「こんなことだろうと思った。やつめ、また一ペニーまちがっている。なおしておかなくちゃだめだ。」これも何かしきりに口の中でもぐもぐ言っているようでした。そうかと思うと、またもうひとりべつ

の小人は、電信が自分のうけもちらしく、カチ、カチ、カチ、カチ、カチカチカチ、カチと一心に電信を打っています。ウォーカさんには、むろん、何を発信しているのか、ちゃんとわかっていました。わかりやすいように書きなおしてみると、「モシモシ、中央郵便局。コチラハ妖精一三一番。報告、コチラハ異状ナシ。ストップ。マクラファスキン氏ハ、カゼノタメ欠勤、タダシ憂ウベキ病状ナシ、以上。」

その時、三ばんめの妖精がさげびました。

「キャリバン国のバンボリンポナンダ村宛という手紙があるんだが、こりゃいったい、どこだろう？」

「ピーダボロ經由だよ。」八ばんめの小人が答えました。「いいか、言うから書きとりたまえ。キャニバル国、ピンチベック県、スボールディング市外——飛行便——いいかね。さあ、ようし、おわりだ。諸君、ひとつトランプはどうだ？」

「大いに賛成!!」一ばんめの妖精はまっさきにそう答えると、もう郵便物の中から三十二枚の手紙をよりだして、「そら、札だ。じゃ、はじめようぜ。」

すると二ばんめの妖精は、その手紙を拾いあげて、しきりにきりはじめました。

「もうわしがちゃんときつたよ。」一ばんめの妖精が言いました。

「じゃ、だれか配れよ。」二ばんめの妖精がさけびました。

「おやおや、なんてひどいてだ、これは。」そう言って、三ばんめの妖精は舌打ちをしました。

「じゃ、わたしからやろう。」四ばんめの妖精が、まず最初に一枚の手紙をいきおいよく机の上に、ほうり出しました。

「なに、わたしのほうが上だよ。」五ばんめの妖精が、自分の札を場の上に、かさねながら言いました。

「おっと、もう一つ上だよ、わがはいのは。」七ばんめが負けずに申しました。

「お気のどくさまだが、こっちはポイントだ。」最後に自分の手札をポイと投げだしながら、八ばんめが、大声にわめきました。

さすがのウォーカさんも、これ以上がまんができませんでした。ひどくドギマギどもり

ながらも、

「諸君、後生だから、そんなに興奮しないでくれたまえ。」

だが、それよりも、諸君はいたいなんのランプをしているんです？」



「いやあ、これはこれは、ウォーカさんですか。」一ばんめの妖精が答えました。「あなたのおじやまをするつもりはけっしてなかったのですが。だが、いかがでしょう。せっかくお目ざめのようなので、ひとつ、

われわれのなかまにおはいりくださってはいませんか？ なあに、いつものやつですよ、ウォーカさん。」
二つ返事というのでしょね、ウォーカさんは、たちまちノコノコと妖精たちの車座の中

になかま入りしました。

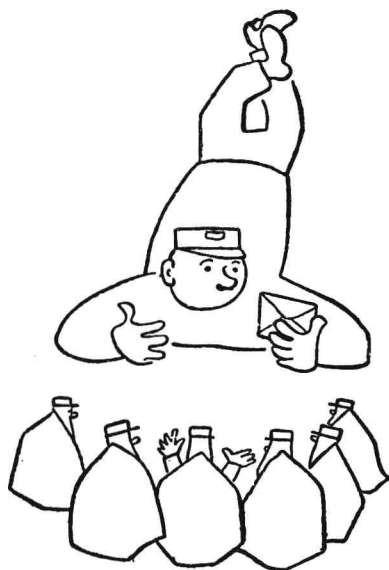
「では、これがウォーカさんの札ふだですから。」そう言いながら、二ばんめの妖精は、例れいの

手紙から二、三枚ぬきだして渡わたしてくれました。

「では、どうぞおはじめください。」

ウォーカさんは渡された手紙を見て言いました。

「きみ、まちがえないでくれたまえよ。ぼくが今もらったのは、まだ配達はいたつしてない郵便ゆうびんじゃ



ないか？」

「ええ、そうですとも。」三ばんめの小人こびとが答えました。「つまり、これが、わたしたちの